

セットアップガイド (WebLogic編)

第4版 2014-01-01

目次

- 改訂情報
- はじめに
 - 本書の目的
 - 前提条件
 - 対象読者
 - 用語解説
- 各種インストール・設定変更
- intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成
- WebLogicの設定
 - Java ヒープサイズの設定
 - Java VM引数の設定
 - JAXBプロバイダの設定
 - タイムゾーンの設定
 - JTAの設定
 - データソースの設定
 - warファイルのデプロイ
- テナント環境の構築
- セットアップで困ったら・・・
- アップデート・パッチの適用

改訂情報

変更年月日	変更内容
2013-04-01	初版
2013-07-01	第2版 下記を追加・変更しました ● 「Java VM引数の設定」を追加 ● 「タイムゾーンの設定」を追加 ● 「JAXBプロバイダの設定」を変更
2013-10-01	第3版 下記を追加・変更しました ● 「Java ヒープサイズの設定」を追加 ● 「DB2の設定」を変更 ● 「Microsoft SQL Serverの設定」を変更 ● 「Oracleの設定」を変更 ● 「PostgreSQLの設定」を変更
2014-01-01	第4版 下記を追加・変更しました ● 目次に「アップデート・パッチの適用」へのリンクを追加

はじめに

本書の目的

本書では Oracle WebLogic Server 12c (12.1.1) に intra-mart Accel Platform のセットアップを行う手順について説明します。

前提条件

リリースノートに記載されているシステム要件を満たしている必要があります。

詳細は「[リリースノート](#)」を参照してください。

対象読者

以下の利用者を対象としています。

- Oracle WebLogic Server 12c (12.1.1) に intra-mart Accel Platform のセットアップを行われる方

用語解説

Oracle WebLogic Server 12c (12.1.1) のホームディレクトリを %WEBLOGIC_HOME% と略します。

Apache HTTP Server をインストールしたディレクトリを %APACHE_HOME% と略します。

Storage として使用するディレクトリを %STORAGE_PATH% と略します。

Webサーバ利用時の静的コンテンツを配置するディレクトリを %WEB_PATH% と略します。

各種インストール・設定変更

intra-mart Accel Platform のセットアップに必要なコンポーネントのインストールおよび設定を行います。

具体的な手順は「[intra-mart Accel Platform セットアップガイド](#)」の「[intra-mart Accel Platform を利用するためのミドルウェアのインストールと設定](#)」を参照してください。

intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成

intra-mart Accel Platform の設定およびwarファイルの出力を行います。

具体的な手順は「[intra-mart Accel Platform セットアップガイド](#)」の「[WARファイルの作成](#)」を参照してください。

WebLogicの設定

WebLogicの設定を行います。

Oracle WebLogic Server 12c (12.1.1) のインストール手順については Oracle WebLogic Server 12c (12.1.1) のマニュアルを参照してください。

Java ヒープサイズの設定

Java ヒープサイズの設定を行います。

- WebLogic環境設定の実行ファイルを編集する。

Java ヒープサイズの設定はWebLogic環境設定の実行ファイルを編集してください。Windowsの場合は **setDomainEnv.cmd**、Linuxの場合は **setDomainEnv.sh** です。
環境設定の実行ファイルをテキストエディタで開き、最少ヒープサイズ、最大ヒープサイズおよびPermanent領域の初期値、Permanent領域の最大値を編集します。

- Windowsの例
この例ではsetDomainEnv.cmdの159行目から始まるJava ヒープサイズの設定を編集しています。

```
...  
  
if "%JAVA_VENDOR%"=="Sun" (  
  set WLS_MEM_ARGS_64BIT=-Xms1024m -Xmx2048m  
  set WLS_MEM_ARGS_32BIT=-Xms256m -Xmx512m  
) else (  
  set WLS_MEM_ARGS_64BIT=-Xms1024m -Xmx2048m  
  set WLS_MEM_ARGS_32BIT=-Xms256m -Xmx512m  
)  
  
...
```

この例ではsetDomainEnv.cmdの177行目から始まるPermanent領域の設定を編集しています。

```

...

set MEM_PERM_SIZE_64BIT=-XX:PermSize=256m

set MEM_PERM_SIZE_32BIT=-XX:PermSize=128m

if "%JAVA_USE_64BIT%"=="true" (
    set MEM_PERM_SIZE=%MEM_PERM_SIZE_64BIT%
) else (
    set MEM_PERM_SIZE=%MEM_PERM_SIZE_32BIT%
)

set MEM_MAX_PERM_SIZE_64BIT=-XX:MaxPermSize=512m

set MEM_MAX_PERM_SIZE_32BIT=-XX:MaxPermSize=256m

if "%JAVA_USE_64BIT%"=="true" (
    set MEM_MAX_PERM_SIZE=%MEM_MAX_PERM_SIZE_64BIT%
) else (
    set MEM_MAX_PERM_SIZE=%MEM_MAX_PERM_SIZE_32BIT%
)

...

```

- Linuxの例

この例ではsetDomainEnv.shの215行目から始まるJava ヒープサイズの設定を編集しています。

```

...

if [ "${JAVA_VENDOR}" = "Sun" ] ; then
    WLS_MEM_ARGS_64BIT="-Xms1024m -Xmx2048m"
    export WLS_MEM_ARGS_64BIT
    WLS_MEM_ARGS_32BIT="-Xms256m -Xmx512m"
    export WLS_MEM_ARGS_32BIT
else
    WLS_MEM_ARGS_64BIT="-Xms1024m -Xmx2048m"
    export WLS_MEM_ARGS_64BIT
    WLS_MEM_ARGS_32BIT="-Xms256m -Xmx512m"
    export WLS_MEM_ARGS_32BIT
fi

...

```

この例ではsetDomainEnv.cmdの241行目から始まるPermanent領域の設定を編集しています。

```

...

MEM_PERM_SIZE_64BIT="-XX:PermSize=256m"
export MEM_PERM_SIZE_64BIT

MEM_PERM_SIZE_32BIT="-XX:PermSize=128m"
export MEM_PERM_SIZE_32BIT

if [ "${JAVA_USE_64BIT}" = "true" ] ; then
    MEM_PERM_SIZE="${MEM_PERM_SIZE_64BIT}"
    export MEM_PERM_SIZE
else
    MEM_PERM_SIZE="${MEM_PERM_SIZE_32BIT}"
    export MEM_PERM_SIZE
fi

MEM_MAX_PERM_SIZE_64BIT="-XX:MaxPermSize=512m"
export MEM_MAX_PERM_SIZE_64BIT

MEM_MAX_PERM_SIZE_32BIT="-XX:MaxPermSize=256m"
export MEM_MAX_PERM_SIZE_32BIT

if [ "${JAVA_USE_64BIT}" = "true" ] ; then
    MEM_MAX_PERM_SIZE="${MEM_MAX_PERM_SIZE_64BIT}"
    export MEM_MAX_PERM_SIZE
else
    MEM_MAX_PERM_SIZE="${MEM_MAX_PERM_SIZE_32BIT}"
    export MEM_MAX_PERM_SIZE
fi

...

```

2. WebLogicを再起動します。

Java VM引数の設定

Java VM引数の設定を行います。

1. WebLogic起動用実行ファイルを編集する。

Java VM引数の設定はWebLogic起動用の実行ファイルを編集してください。Windowsの場合は **startWebLogic.cmd**、Linuxの場合は **startWebLogic.sh** です。

起動用の実行ファイルをテキストエディタで開き、環境変数 **JAVA_OPTIONS** にJava VM引数の設定を追記します。

- Windowsの例

この例ではstartWebLogic.cmdの84行目にJava VM引数(-Duser.language=zh -Duser.country=CN)の設定を追記していま

す。

```
...
call "%DOMAIN_HOME%\bin\setDomainEnv.cmd" %*
set JAVA_OPTIONS=%JAVA_OPTIONS% -Duser.language=zh -Duser.country=CN
set SAVE_JAVA_OPTIONS=%JAVA_OPTIONS%
...
```

- Linuxの例
この例ではstartWebLogic.shの82行目にJava VM引数(-Duser.language=zh -Duser.country=CN)の設定を追記しています。

```
...
.${DOMAIN_HOME}/bin/setDomainEnv.sh $*
JAVA_OPTIONS="${JAVA_OPTIONS} -Duser.language=zh -Duser.country=CN"
SAVE_JAVA_OPTIONS="${JAVA_OPTIONS}"
...
```

- WebLogicを再起動します。

JAXBプロバイダの設定

JAXBプロバイダの設定を行います。



コラム

WebLogicで intra-mart Accel Platform を運用する場合、JAXBプロバイダの設定を行ってください。
JAXBプロバイダの設定を行わない場合、会社・組織などのエクスポートを行うと正しいデータが出力されません。

- 下記のシステムプロパティを設定することで、JAXBプロバイダの設定が可能です。

システムプロパティ	値
com.sun.xml.ws.spi.db.BindingContextFactory	com.sun.xml.ws.db.glassfish.JAXBRIContextFactory
javax.xml.bind.JAXBContext	com.sun.xml.bind.v2.ContextFactory

システムプロパティの指定はJava VM引数で指定します。上記のシステムプロパティを設定するには以下のJava VM引数に以下の設定を追記します。

```
-Dcom.sun.xml.ws.spi.db.BindingContextFactory=com.sun.xml.ws.db.glassfish.JAXBRIContextFactory -Djavax.xml.bind.JAXBContext=com.sun.xml.bind.v2.ContextFactory
```

Java VM引数の設定方法については「[Java VM引数の設定](#)」を参照してください。

タイムゾーンの設定

タイムゾーンの設定を行います。



コラム

タイムゾーンの初期設定は、Java VMに依存します。



注意

タイムゾーンは、「[設定ファイルリファレンス タイムゾーンマスタ](#)」に存在するものを設定してください。



注意

この設定は運用開始前に行ってください。
運用開始後に変更した場合、日時データに不整合が発生します。

- システムプロパティにタイムゾーンを設定します。

タイムゾーンはシステムプロパティ「user.timezone」で指定します。
システムプロパティの指定は Java VM 引数で行います。例えば、タイムゾーンを UTC に設定する場合は Java VM 引数に以下を追記します。

```
-Duser.timezone=UTC
```

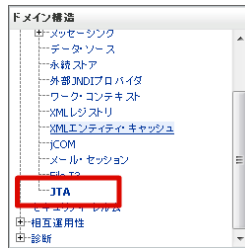
Java VM引数の設定方法については「[Java VM引数の設定](#)」を参照してください。

JTAの設定

JTAの設定を行います。

テナント環境構築時などの時間がかかるトランザクション処理のために、JTAのタイムアウト時間を変更します。

1. 左メニューの [サービス]-[JTA] を選択します。



2. [タイムアウト] を変更し、[保存]をクリックします。これで、JTAの設定は終わりです。

base_domainの設定

機能 監視 制御 セキュリティ Webサービス・セキュリティ ノート

全般 JTA JPA EJB Webアプリケーション ロギング ログ・フィルタ

保存

このページでは、このWebLogic ServerドメインのJava®トランザクションAPI (JTA)機能を定義します。

タイムアウト:	300	2フェーズ・コミット・トランザクションの第1フェーズで、アクティブなトランザクションが待機できる最大秒数を指定します。指定の時間が経過すると、トランザクションは自動的にロールバックされます。 詳細...
最大タイムアウト:	86400	トランザクション・マネージャが、2フェーズ・コミット・トランザクションの第2フェーズを完了しようとして待機する最大秒数を指定します。 詳細...
beforeCompletionの反復上限:	10	トランザクション・マネージャが、このWebLogic Serverドメインに対してbeforeCompletion同期化コールバックを実行するサイクルの最大数。 詳細...
最大トランザクション数:	10000	このWebLogic Serverドメインのサーバーで許可される同時進行トランザクションの最大数。 詳細...
一査名の最大数:	1000	保持する統計の対象となる一査名のトランザクション名の最大数。 詳細...
チェックポイント間隔:	300	トランザクション・マネージャが、新しいトランザクション・ログ・ファイルを作成し、すべての古いトランザクション・ログ・ファイルを確認してそれらを削除できるかどうかを確認する間隔。 詳細...
☒ ヒューリスティックの無視		トランザクション・マネージャがトランザクションのヒューリスティックな終了に対して自動的にXA Resource forget処理を実行するかどうかを指定します。 詳細...
リソース登録解除の待ち時間:	30	トランザクション・マネージャが、リソースの関与するトランザクションの完了をリソースが登録解除されるまで待機する秒数。この待ち時間の設定は、登録解除されたリソース(アプリケーションと一連にパッケージされているJDBCデータソース・モジュールなど)が原因でトランザクションが放棄されるリスクを最小限に抑えるために役立ちます。 詳細...
☒ XA呼出しの並列実行		使用可能なスレッドがある場合にXA呼出しを並列に実行することを指定します。 詳細...
☒ 2フェーズ・コミットの有効化		2フェーズ・コミット・プロトコルを使用して2つ以上のリソース・マネージャ間でトランザクションを調整することを指定します。 詳細...

[詳細...](#)

保存

データソースの設定

データソースの設定を行います。使用するデータベースに応じて設定を行ってください。

Oracleの設定

Oracleを使用する場合の設定を行います。

1. 左メニューの [サービス]-[JDBC]-[データ ソース] を選択します。
右画面の[新規]ボタンをクリックし、[汎用データ・ソース]を選択します。

Oracle WebLogic Server Administration Console 12c

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ようこそ, weblogic 接続先: base_domain

ホーム > JDBCC データソースのサマリー

JDBCC データソースのサマリー

JDBCC データソースは、JDBCC 接続のプールを介したデータベース接続を提供する JNDI シリーにバインドされたオブジェクトです。アプリケーションから JNDI シリーのデータソースをルックアップして、データソースからデータベース接続を借りることができます。

このページでは、このドメイン内に作成された JDBCC データソース オブジェクトの概要を示します。

この表のカスタマイズ

データソース (フィルタされています - 他にも列があります)

名前	タイプ	JNDI 名	ターゲット
汎用データソース			
GridLink データソース			
マルチ データソース			

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

表示する項目がありません

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

WebLogic Server バージョン 12.1.1.0
Copyright © 1996, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

2. [名前]、[JNDI 名]、[データベースのタイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベースのタイプ

Oracle

新しい JDBCC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBCC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBCC データソースを識別するために使用されます。

*は必須フィールドです

新しい JDBCC データソースの名前を指定してください。

*名前: intra-mart DEFAULT

新しい JDBCC データソースの JNDI 名を指定してください。

JNDI 名: jdbc/default

データベースのタイプを選択してください。

データベースのタイプ: Oracle

戻る 次 終了 取消



コラム

[JNDI 名]は intra-mart Accel Platform 構成ファイルの **DataSource マッピングの設定** の **data-source-mapping-config.xml** において、<resource-ref-name> に記述した JNDI 名を入力してください。

3. [データベース・ドライバ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベース・ドライバ

Oracle's Driver (Thin) for Instance connections; Versions:9.0.1 and later

新しい JDBCC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBCC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBCC データソースを識別するために使用されます。

データベースのタイプ: Oracle

データベース接続の作成に使用するデータベースドライバを指定してください。注意: *はドライバが Oracle WebLogic Server に明示的にサポートされていることを示します。

データベースドライバ: *Oracle's Driver (Thin) for Instance connections; Versions:9.0.1 and later

戻る 次 終了 取消

4. [次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

トランザクション・オプション

非XA JDBCドライバを使用して新しいデータソースにデータベース接続を作成します。

このデータソースでグローバルトランザクションをサポートするかどうかを選択してください。サポートする場合は、このデータソースのトランザクション・プロトコルを選択してください。

☒ **グローバルトランザクションのサポート**

ロギング・ラスト・リソース(LLR)トランザクションの最適化を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。「2フェーズ・コミットのエミュレート」のかわりに使用することをお勧めします。

☐ **ロギング・ラスト・リソース**

JTAを使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションへの参加をエミュレートできるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションは、ヒューリスティックな状態に附えられるアプリケーションでのみ使用してください。

☐ **2フェーズ・コミットのエミュレート**

1フェーズ・コミットトランザクション処理を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションを有効にすると、他のリソースはグローバルトランザクションに参加できません。

☒ **1フェーズ・コミット**

戻る 次 終了 取消

5. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベース・ユーザ名]、[パスワード]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

接続プロパティ

接続プロパティを定義します。

接続先のデータベースの名前を指定してください。

データベース名:

データベース・サーバーの名前またはIPアドレスを指定してください。

ホスト名:

データベースへの接続に使用するデータベース・サーバーのポートを指定してください。

ポート:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザー名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。

パスワード:

パスワードの確認:

戻る 次 終了 取消

6. [構成のテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、[次へ]ボタンをクリックします。
(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)

新しいJDBCデータソースの作成

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

データベース接続のテスト

データベースの可用性、および指定した接続プロパティをテストします。

接続プールでのデータベース接続の作成に使用するJDBCドライバの完全パッケージ名を指定してください。
(このドライバ・クラスは、デプロイ先のいずれかのサーバーのクラスパスに含まれる必要があります。)

ドライバ・クラス名:

接続先データベースのURLを指定してください。使用するJDBCドライバによって、URLの書式が異なります。

URL:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザー名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。
(注意: 安全なパスワード管理のために、パスワードは「プロパティ」フィールドではなく「パスワード」フィールドに入力してください。)

パスワード:

パスワードの確認:

データベース接続の作成時にJDBCドライバに連するプロパティを指定してください。

プロパティ:

ドライバ・プロパティのセット。値は指定されたシステム・プロパティから実行時に導出されます。

システム・プロパティ:

データベース接続のテストに使用する表名またはSQL文を指定してください。

テスト対象の表名:

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

7. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[終了]ボタンをクリックします。
これで、JDBCデータソースの登録は終わりです。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

ターゲットの選択

新しいJDBCデータソースのデプロイ先として、1つまたは複数のターゲットを選択できます。ターゲットを選択しない場合でもデータソースは作成されますが、デプロイされません。その場合、後でデータソースをデプロイする必要があります。

サーバー

☒ AdminServer

戻る 次 終了 取消

DB2の設定

DB2を使用する場合の設定を行います。

- 左メニューの [サービス]-[JDBC]-[データソース] を選択します。
右画面の[新規]ボタンをクリックし、[汎用データソース]を選択します。

Oracle WebLogic Server Administration Console 12c

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ようこそ, weblogic | 接続先: base_domain

ホーム > JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースは、JDBC 接続のプールを介したデータベース接続を提供する JNDI シリーにバインドされたオブジェクトです。アプリケーションから JNDI シリーのデータソースをルックアップして、データソースからデータベース接続を借りることができます。

このページでは、このドメイン内に作成された JDBC データソース オブジェクトの概要を示します。

この表のカスタマイズ

データソース (フィルタされています - 他にも列があります)

名前	タイプ	JNDI 名	ターゲット
汎用データソース			
GridLink データソース			
マルチ データソース			

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

表示する項目がありません

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

操作ガイド

- JDBC 汎用データソースの作成
- JDBC GridLink データソースの作成
- JDBC マルチ データソースの作成
- JDBC データソースの削除
- JDBC マルチ データソースの削除

システム ステータス

WebLogic Server バージョン 12.1.1.0
Copyright © 1996, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

2. [名前]、[JNDI名]、[データベースのタイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベースのタイプ

DB2

新しいJDBCTemplateの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しいJDBC データソースを識別するために使用されます。

*は必須フィールドです

新しいJDBC データソースの名前を指定してください。

*名前: intra-mart DEFAULT

新しいJDBC データソースのJNDI名を指定してください。

JNDI名: jdbc/default

データベースのタイプを選択してください。

データベースのタイプ: DB2

戻る 次 終了 取消



コラム

[JNDI名]は intra-mart Accel Platform 構成ファイルの **DataSourceマッピングの設定** の **data-source-mapping-config.xml** において、<resource-ref-name> に記述したJNDI名を入力してください。

3. [データベース・ドライバ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベース・ドライバ

Oracle's DB2 Driver (Type 4) Versions:7.X and later

新しいJDBCTemplateの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しいJDBC データソースを識別するために使用されます。

データベース DB2

データベースのタイプ: DB2

データベース接続の作成に使用するデータベース・ドライバを指定してください。注意: *はドライバがOracle WebLogic Serverに明示的にサポートされていることを示します。

データベース・ドライバ: *Oracle's DB2 Driver (Type 4) Versions:7.X and later

戻る 次 終了 取消

4. [次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

トランザクション・オプション

非XA JDBCドライバを使用して新しいデータソースにデータベース接続を作成します。

このデータソースでグローバルトランザクションをサポートするかどうかを選択してください。サポートする場合は、このデータソースのトランザクションプロトコルを選択してください。

☒ グローバルトランザクションのサポート

ロギング・ラスタ・リソース (LRS) トランザクションの最適化を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。「2フェーズ・コミットのエミュレート」のかわりに使用することをお薦めします。

☐ ロギング・ラスタ・リソース

JTAを使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションへの参加をエミュレートできるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションは、ヒューリスティックな状態に耐えられるアプリケーションでのみ使用してください。

☐ 2フェーズ・コミットのエミュレート

1フェーズ・コミット・トランザクション処理を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションを有効にすると、他のリソースはグローバルトランザクションに参加できません。

☒ 1フェーズ・コミット

戻る 次 終了 取消

5. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベース・ユーザ名]、[パスワード] を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

接続プロパティ

接続プロパティを定義します。

接続先のデータベースの名前を指定してください。

データベース名:

データベース・サーバーの名前またはIPアドレスを指定してください。

ホスト名:

データベースへの接続に使用するデータベース・サーバーのポートを指定してください。

ポート:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザ名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。

パスワード:

パスワードの確認:

戻る 次 終了 取消

6. [構成のテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、[次へ]ボタンをクリックします。
(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)

新しいJDBCデータソースの作成

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

データベース接続のテスト

データベースの可用性、および指定した接続プロパティをテストします。

接続プールでのデータベース接続の作成に使用するJDBCドライバクラスの完全パッケージ名を指定してください。
(このドライバクラスは、デプロイ先のいずれかのサーバーのクラスパスに含まれる必要があります。)

ドライバクラス名:

接続先データベースのURLを指定してください。使用するJDBCドライバによって、URLの書式が異なります。

URL:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザー名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。
(注意: 安全なパスワード管理のために、パスワードは「プロパティ」フィールドではなく「パスワード」フィールドに入力してください。)

パスワード:

パスワードの確認:

データベース接続の作成時にJDBCドライバに渡すプロパティを指定してください。

プロパティ:

```
user=imart
portNumber=50000
databaseName=dbname
serverName=localhost
batchPerformanceWorkaround=true
```

ドライバ・プロパティのセット。値は指定されたシステム・プロパティから実行時に導出されます。

システム・プロパティ:

データベース接続のテストに使用する表名またはSQL文を指定してください。

テスト対象の表名:

```
SQL SELECT COUNT(*) FROM
SYSIBM.SYSTABLES
```

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

7. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[終了]ボタンをクリックします。
これで、JDBCデータソースの登録は終わりです。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

ターゲットの選択

新しいJDBCデータソースのデプロイ先として、1つまたは複数のターゲットを選択できます。ターゲットを選択しない場合でもデータソースは作成されますが、デプロイされません。その場合、後でデータソースをデプロイする必要があります。

サーバー

☒ AdminServer

戻る 次 終了 取消

Microsoft SQL Serverの設定

Microsoft SQL Serverを使用する場合の設定を行います。

- 左メニューの [サービス]-[JDBC]-[データソース] を選択します。
右画面の[新規]ボタンをクリックし、[汎用データソース]を選択します。

Oracle WebLogic Server Administration Console 12c

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ようこそ, weblogic | 接続先: base_domain

ホーム > JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースは、JDBC 接続のプールを介したデータベース接続を提供する JNDI シリーにバインドされたオブジェクトです。アプリケーションから JNDI シリーのデータソースをルックアップして、データソースからデータベース接続を借りることができます。

このページでは、このドメイン内に作成された JDBC データソース オブジェクトの概要を示します。

この表のカスタマイズ

データソース (フィルタされています - 他にも列があります)

名前	タイプ	JNDI 名	ターゲット
汎用データソース			
GridLink データソース			
マルチ データソース			

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

表示する項目がありません

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

操作ガイド

- JDBC 汎用データソースの作成
- JDBC GridLink データソースの作成
- JDBC マルチ データソースの作成
- JDBC データソースの削除
- JDBC マルチ データソースの削除

システム ステータス

WebLogic Server バージョン 12.1.1.0
Copyright © 1996, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

2. [名前]、[JNDI名]、[データベースのタイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベースのタイプ

MS SQL Server

新しい JDBC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBC データソースを識別するために使用されます。

*は必須フィールドです

新しい JDBC データソースの名前を指定してください。

*名前: intra-mart DEFAULT

新しい JDBC データソースの JNDI 名を指定してください。

JNDI 名: jdbc/default

データベースのタイプを選択してください。

データベースのタイプ: MS SQL Server

戻る 次 終了 取消



コラム

[JNDI名]は intra-mart Accel Platform 構成ファイルの **DataSource マッピングの設定** の **data-source-mapping-config.xml** において、**<resource-ref-name>** に記述した JNDI 名を入力してください。

3. [データベース・ドライバ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベース・ドライバ

Oracle's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions: 7.0 and later

新しい JDBC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBC データソースを識別するために使用されます。

データベースのタイプ: MS SQL Server

データベース接続の作成に使用するデータベース・ドライバを指定してください。注意: *はドライバが Oracle WebLogic Server に明示的にサポートされていることを示します。

データベース・ドライバ: *Oracle's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions: 7.0 and later

戻る 次 終了 取消

4. [次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

トランザクションオプション

非XA JDBCドライバを使用して新しいデータソースにデータベース接続を作成します。

このデータソースでグローバルトランザクションをサポートするかどうかを選択してください。サポートする場合は、このデータソースのトランザクションプロトコルを選択してください。

☒ **グローバルトランザクションのサポート**

ロギング・ラスト・リソース (LLR) トランザクションの最適化を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。「2フェーズ・コミットのエミュレート」のかわりに使用することをお勧めします。

☐ **ロギング・ラスト・リソース**

JTAを使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションへの参加をエミュレートできるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションは、ヒューリスティックな状況に耐えられるアプリケーションでのみ使用してください。

☐ **2フェーズ・コミットのエミュレート**

1フェーズ・コミット・トランザクション処理を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションを有効にすると、他のリソースはグローバルトランザクションに参加できません。

☒ **1フェーズ・コミット**

戻る 次 終了 取消

5. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベース・ユーザ名]、[パスワード] を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

接続プロパティ

接続プロパティを定義します。

接続先のデータベースの名前を指定してください。

データベース名:

データベース・サーバーの名前またはIPアドレスを指定してください。

ホスト名:

データベースへの接続に使用するデータベース・サーバーのポートを指定してください。

ポート:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザ名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。

パスワード:

パスワードの確認:

戻る 次 終了 取消

6. [構成のテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、[次へ]ボタンをクリックします。
(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)

新しいJDBCデータソースの作成

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

データベース接続のテスト

データベースの可用性、および指定した接続プロパティをテストします。

接続プールでのデータベース接続の作成に使用するJDBCドライバの完全パッケージ名を指定してください。
(このドライバ・クラスは、デプロイ先のいずれかのサーバーのクラスパスに含まれる必要があります。)

ドライバ・クラス名:

接続先データベースのURLを指定してください。使用するJDBCドライバによって、URLの書式が異なります。

URL:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザー名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。
(注意: 安全なパスワード管理のために、パスワードは「プロパティ」フィールドではなく「パスワード」フィールドに入力してください。)

パスワード:

パスワードの確認:

データベース接続の作成時にJDBCドライバに渡すプロパティを指定してください。

プロパティ:

ドライバ・プロパティのセット。値は指定されたシステム・プロパティから実行時に導出されます。

システム・プロパティ:

データベース接続のテストに使用する表名またはSQL文を指定してください。

テスト対象の表名:

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

7. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[終了]ボタンをクリックします。
これで、JDBCデータソースの登録は終わりです。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

ターゲットの選択

新しいJDBCデータソースのデプロイ先として、1つまたは複数のターゲットを選択できます。ターゲットを選択しない場合でもデータソースは作成されますが、デプロイされません。その場合、後でデータソースをデプロイする必要があります。

サーバー

☒ AdminServer

戻る 次 終了 取消

PostgreSQLの設定

PostgreSQLを使用する場合の設定を行います。



コラム

PostgreSQLを使用する場合、予めJDBCドライバをWebLogicのクラスパスに通す必要があります。下記にその例を記載します。

1. JDBCドライバを %WEBLOGIC_HOME%/server/lib のディレクトリにコピーします。
2. Windowsの場合は %WEBLOGIC_HOME%/common/bin/commEnv.cmd、Linuxの場合は commEnv.sh を編集し、環境変数 WEBLOGIC_CLASSPATH にJDBCドライバのパスを追加します。
下記はWindowsの例です。

```
set WEBLOGIC_CLASSPATH=%JAVA_HOME%\lib\tools.jar;%WL_HOME%\server\lib\weblogic.jar
```

1. 左メニューの [サービス]-[JDBC]-[データソース] を選択します。
右画面の[新規]ボタンをクリックし、[汎用データソース]を選択します。

Oracle WebLogic Server Administration Console 12c

ホーム ログアウト プリファレンス 記録 ヘルプ

ようこそ, weblogic 接続先: base_domain

ホーム > JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースのサマリー

JDBC データソースは、JDBC 接続のプールを介したデータベース接続を提供する JNDI シリーにバインドされたオブジェクトです。アプリケーションから JNDI シリーのデータソースをルックアップして、データソースからデータベース接続を借りることができます。

このページでは、このドメイン内に作成された JDBC データソース オブジェクトの概要を示します。

この表のカスタマイズ

データソース (フィルタされています - 他にも列があります)

新規	削除	タイプ	JNDI 名	ターゲット
新規	削除	汎用データソース	GridLink データソース	マルチ データソース

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

表示する項目がありません

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

WebLogic Server バージョン 12.1.1.0
Copyright © 1996, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。



コラム

[JNDI 名] は intra-mart Accel Platform 構成ファイルの **DataSource マッピングの設定** の **data-source-mapping-config.xml** において、**<resource-ref-name>** に記述した JNDI 名を入力してください。

- [名前]、[JNDI 名]、[データベースのタイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベースのタイプ

PostgreSQL

新しい JDBC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBC データソースを識別するために使用されます。

*は必須フィールドです

新しい JDBC データソースの名前を指定してください。

*名前: intra-mart DEFAULT

新しい JDBC データソースの JNDI 名を指定してください。

JNDI 名: jdbc/default

データベースのタイプを選択してください。

データベースのタイプ: PostgreSQL

戻る 次 終了 取消

- [データベース・ドライバ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

データベース・ドライバ

PostgreSQL's Driver (Type 4) Versions: Any

新しい JDBC データソースの作成

戻る 次 終了 取消

JDBC データソースのプロパティ

次のプロパティは、新しい JDBC データソースを識別するために使用されます。

データベースのタイプ: PostgreSQL

データベース接続の作成に使用するデータベース・ドライバを指定してください。注意: *はドライバが Oracle WebLogic Server に明示的にサポートされていることを示します。

データベース・ドライバ: PostgreSQL's Driver (Type 4) Versions: Any

戻る 次 終了 取消

- [次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

トランザクション・オプション

非XA JDBCドライバを使用して新しいデータソースにデータベース接続を作成します。

このデータソースでグローバルトランザクションをサポートするかどうかを選択してください。サポートする場合は、このデータソースのトランザクション・プロトコルを選択してください。

☒ グローバルトランザクションのサポート

ロギング・ラスト・リソース (LLR) トランザクションの最適化を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。「2フェーズ・コミットのエミュレート」のかわりに使用することをお薦めします。

☐ ロギング・ラスト・リソース

JTAを使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションへの参加をエミュレートできるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションは、ヒューリスティックな状況に耐えられるアプリケーションでのみ使用してください。

☐ 2フェーズ・コミットのエミュレート

1フェーズ・コミット・トランザクション処理を使用してデータソースからの非XA JDBC接続がグローバルトランザクションに参加できるようにする場合は、このオプションを選択します。このオプションを有効にすると、他のリソースはグローバルトランザクションに参加できません。

☒ 1フェーズ・コミット

戻る 次 終了 取消

5. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベース・ユーザ名]、[パスワード] を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

接続プロパティ

接続プロパティを定義します。

接続先のデータベースの名前を指定してください。

データベース名:

データベース・サーバーの名前またはIPアドレスを指定してください。

ホスト名:

データベースへの接続に使用するデータベース・サーバーのポートを指定してください。

ポート:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザ名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。

パスワード:

パスワードの確認:

戻る 次 終了 取消

6. [構成のテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、[次へ]ボタンをクリックします。
(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)

新しいJDBCデータソースの作成

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

データベース接続のテスト

データベースの可用性、および指定した接続プロパティをテストします。

接続プールでのデータベース接続の作成に使用するJDBCドライバクラスの完全パッケージ名を指定してください。
(このドライバクラスは、デプロイ先のいずれかのサーバーのクラスパスに含まれる必要があります。)

ドライバクラス名:

接続先データベースのURLを指定してください。使用するJDBCドライバによって、URLの書式が異なります。

URL:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのユーザー名を指定してください。

データベース・ユーザー名:

データベース接続の作成に使用するデータベース・アカウントのパスワードを指定してください。
(注意: 安全なパスワード管理のために、パスワードは「プロパティ」フィールドではなく「パスワード」フィールドに入力してください)

パスワード:

パスワードの確認:

データベース接続の作成時にJDBCドライバに渡すプロパティを指定してください。

プロパティ:

ドライバ・プロパティのセット。値は指定されたシステム・プロパティから実行時に導出されます。

システム・プロパティ:

データベース接続のテストに使用する表名またはSQL文を指定してください。

テスト対象の表名:

構成のテスト 戻る 次 終了 取消

7. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[終了]ボタンをクリックします。
これで、JDBCデータソースの登録は終わりです。

新しいJDBCデータソースの作成

戻る 次 終了 取消

ターゲットの選択

新しいJDBCデータソースのデプロイ先として、1つまたは複数のターゲットを選択できます。ターゲットを選択しない場合でもデータソースは作成されますが、デプロイされません。その場合、後でデータソースをデプロイする必要があります。

サーバー

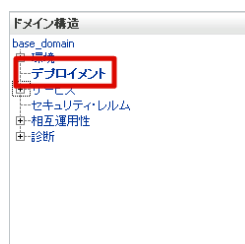
☒ AdminServer

戻る 次 終了 取消

warファイルのデプロイ

warファイルのデプロイを行います。

1. 左メニューの [デプロイメント] を選択します。



2. [インストール]ボタンをクリックします。

デプロイメントのサマリー

制御 **監視**

このページでは、このドメインにインストールされたJava EEアプリケーションとスタンドアロンアプリケーション・モジュールが一覧表示されます。インストールされたアプリケーションとモジュールは、最初にアプリケーション名を選択し、このページのコントロールを使用して起動、停止、更新(再デプロイ)したり、ドメインから削除したりできます。

このドメインのターゲットにデプロイするアプリケーションまたはモジュールを新しくインストールするには、「インストール」ボタンを使用します。

この表のカスタマイズ

デプロイメント

インストール 更新 削除 起動 停止

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

名前	状態	ヘルス	タイプ	デプロイ順序
表示する項目がありません				

インストール 更新 削除 起動 停止

表示項目 0 - 0/0 前 | 次

3. [パス]にwarファイルのフルパスを入力し、[次]ボタンをクリックします。

アプリケーション・インストール・アシスタント

戻る 次 終了 取消

インストールおよびデプロイの準備をするデプロイメントの選択

インストールするアプリケーションのルート・ディレクトリ、アーカイブ・ファイル、展開されたアーカイブ・ディレクトリ、またはアプリケーション・モジュール・ディスクリプタを表すパスを選択してください。アプリケーション・ディレクトリまたはファイルのパスを「パス」フィールドに入力することもできます。

注意:以下に表示されるのは有効なファイル・パスのみです。デプロイメント・ファイルが見つからない場合、ファイルをアップロードするか、アプリケーションに必要なデプロイメント・ディスクリプタが含まれているかどうかを確認してください。

パス: D:\work\imart.war

最近使用されたパス: E:\

現在の場所: localhost \D: \work

imart.war

戻る 次 終了 取消

4. [次]ボタンをクリックします。

アプリケーション・インストール・アシスタント

戻る 次 終了 取消

ターゲット指定スタイルの選択

ターゲットは、このデプロイメントが実行されるサーバー、クラス、または仮想ホストです。アプリケーションの割当には、いくつかの方法があります。

☒ このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールする

アプリケーションとそのコンポーネントが同じ場所に割り当てられます。これは最もよく利用される方法です。

☐ このデプロイメントをライブラリとしてインストールする

アプリケーション・ライブラリは、他のデプロイメントが共有できるデプロイメントです。ライブラリの参照元アプリケーションを実行するすべてのターゲットでライブラリを使用できるようにする必要があります。

戻る 次 終了 取消

5. [次]ボタンをクリックします。

アプリケーション・インストール・アシスタント

戻る 次 終了 取消

オプション設定

これらの設定は、変更することもデフォルトを受け入れることもできます

全般

このデプロイメントの名前を指定してください。

名前: imart

セキュリティ

このアプリケーションに使用するセキュリティ・モデルを指定してください。

☒ DDのみ: デプロイメント・ディスクリプタ内に定義されたロールとポリシーのみを使用します。

☐ カスタム・ロール: 管理コンソール内に定義されたロールを使用します。デプロイメント・ディスクリプタ内に定義されたポリシーを使用します。

☐ カスタム・ロールおよびポリシー: 管理コンソール内に定義されたロールとポリシーのみを使用します。

☐ 詳細: レルムの構成ページで構成したカスタム・モデルを使用します。

ソースのアクセス可能性

ソース・ファイルをどのようにアクセス可能にするかを指定してください。

☒ デプロイメントのターゲットに定義されるデフォルトを使用

推奨の選択。

☐ すべてのターゲットにこのアプリケーションをコピーする

デプロイ時に、アプリケーションが割り当てられる管理ターゲット・サーバーにファイルが自動的にコピーされます。

☐ デプロイメントを次の場所からアクセス可能にする

場所: D:\work\imart.war

すべてのターゲットからアクセスされる。このアプリケーションのファイルの場所を指定してください。これは通常は共有ディレクトリです。この場所にアプリケーションのファイルが存在し、すべてのターゲットからこの場所へアクセスできる必要があります。

戻る 次 終了 取消

6. [終了]ボタンをクリックします。

アプリケーション・インストール・アシスタント

戻る 次 終了 取消

選択項目を確認して「終了」をクリック

デプロイメントを完了するには、「終了」をクリックします。完了するまでしばらくかかる場合があります。

— 追加構成 —

このアプリケーションが正常に機能するには、追加構成が必要な場合があります。このアシスタントの完了後、このアプリケーションの構成を確認しますか。

☒ はい、デプロイメントの構成画面に移動します。

☐ いいえ、後で構成を確認します。

— サマリー —

デプロイメント: D:\work\mart.war

名前: imart

ステージング・モード: 選択したターゲットに定義されるデフォルトを使用

セキュリティ・モデル: DDのみ、デプロイメント・ディスクリプタ内に定義されたロールとポリシーのみを使用します。

ターゲットのサマリー

コンポーネント	ターゲット
imart	AdminServer

戻る 終了 取消

7. [保存]ボタンをクリックします。これで、warファイルのデプロイは終わりです。

imartの設定

概要 デプロイメント・プラン 構成 セキュリティ ターゲット 制御 テスト 監視 ノート

保存

このページでは、Webアプリケーションのインストール済み構成を表示します。

名前: imart このアプリケーション・デプロイメントの名前。 [詳細...](#)

コンテキスト・ルート: /imart サーブレットがこのWebアプリケーションを探すときに使用する、特定のパス。 [詳細...](#)

パス: D:\work\imart.war 管理サーバー上のデプロイ可能なユニットのソースへのパス。 [詳細...](#)

デプロイメント・プラン: (プラン未指定) 管理サーバー上のデプロイメント・プラン・ドキュメントへのパス。 [詳細...](#)

ステージング・モード: (未指定) アプリケーションの準備段階に、管理サーバーのソースから管理対象サーバーのステージング領域にアプリケーションのファイルがコピーされるかどうかを指定するモード。 [詳細...](#)

セキュリティ・モデル: DDOnly セキュリティ・モデルでは、デプロイメントを保護する方法を指定します。 [詳細...](#)

デプロイ順序: 100 起動中にこのユニットがデプロイされたときを表す数値で、サーバー上の他のデプロイ可能ユニットに対する相対的な値。 [詳細...](#)

デプロイメント・プリンシパル名: 起動および停止中にファイルまたはアーカイブをデプロイするときに使用されるプリンシパルを示す文字列値。このプリンシパルは、ApplicationLifecycleListenerなどのインタフェース用のアプリケーション・コードを呼び出すときに、現在のサブジェクトを決定するために使用されます。プリンシパル名が指定されていない場合、匿名プリンシパルが使用されます。 [詳細...](#)

保存

モジュールおよびコンポーネント

表示項目 1 - 1/1 前 | 次

名前	タイプ
imart	Webアプリケーション
Webサービス	
表示項目なし	

表示項目 1 - 1/1 前 | 次

テナント環境の構築

intra-mart Accel Platform のテナント環境を構築します。

具体的な手順は「[テナント環境の構築](#)」を参照してください。

セットアップで困ったら・・・
アップデート・パッチの適用